
僕の戦国時代

虫松

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の戦国時代

【Nコード】

N2896Z

【作者名】

虫松

【あらすじ】

僕はいつも通り、工場から自宅へ帰る途中に広いものをした。鈴のついた髪留め、それを拾い上げた瞬間、僕は目眩に襲われた。普通の生活から一変、戦国時代へやって来た主人公が、軍師となり、出世していく、歴史スペクトル、歴史は変わるのか？

プロローグ

僕は退屈だった。つい最近、就職も決まった。小さな工場での事務作業、毎日同じ机に座り毎日同じ書類に目を通す。こんな人生、僕は望んでいたわけじゃない。彼女もいない。

趣味は、パソコン、ゲーム、はいオタクです。

歴史シミュレーションゲームが好きです。三国志とか信長の暴とかファイヤーエ レムとか
多くの兵士を動かして、知略を巡らし、勝利する。忍者使って情報集めたり、政略結婚したり、
裏切りさせたり、戦国時代って、毎日、命がけだったんだろうな。

今日も朝来た道をまた同じ経路で帰るはずだった。
工事中、迂回して下さいの看板があった。

（人生迂回しまくりだな。はあー絶対出世とか関係ないよな）

迂回する道を歩くと

チャリン！

何か蹴ったか踏んだか鈴の音がした。

（うん？何だ）

暗い夜道の中、鈴のついた髪留めを見つけた。

（何だ、落とし物か？）

僕は髪留めを拾い上げた……
クッラ！！

（目眩が……頭が痛い！）

暫くすると元に戻った。何だったんだ今の感覚は？

（この髪留めを、かなり古いものだな、鈴は錆びて真っ黒だ）

僕はとりあえずポケットに髪留めを入れた。

（後で交番にでも届けるか。）

「よう、久しぶり！」

突然、後ろから声をかけられた。

「おお、久しぶりこんな所で会うなんてな」

声をかけて来たのは、同じ高校だった。三好だ。

いい大学に入っているいい会社に入って、イケメンDeath

（あー神様、何て不平等な世の中何でしょう。しかも可愛い子を横に連れ腕組みしていまーす）

「デート中なのかい」

「今どっか行こうかって話してたんだよ。この子な俺の彼女の菊川さん」

「菊川です。始めまして」

「田中です。」

僕は名前を名乗った。名乗ったじゃないな。名前を言った。

何て平凡な苗字何だろ。田んぼの中で田中だよな僕の祖先、農民に決定。

菊川さん可愛い、大和撫子、黒髪のお嬢様。

いいお家でお産まれになられたんでしょうね。

多分、時代が違えば、僕と菊川さんは顔も名前も知らずに死んでいったに違いない。

「えーと何か？」

「いいえ何でもありません。すいません」

僕は謝った。ずっと顔を見てたらしい。

「折角会ったし一緒に飲みに行くか？」

「そ、そうだね。でもデートの邪魔じゃないか。また今度にしようか」

「今度つて、もうないんだよ。人生一度つきり。さあ飲みに行こう！」

僕は三好に連れられ、飲み屋へ連れてかれた。

飲んだ。楽しかった。

菊川さんの家族の話や茶道をや日本舞踊の話などした。三好のエリートサラリーマンの野望はつまらなかった。

そして2時間ほどして三好と菊川さんと別れた。

（はゝあ一人かこれからずっと一人とかあり得るよなあ）

帰りにコンビニによりビールを買った。

（サイフ、財布つと、あつ？）

チャリン！

僕はポケットに髪留めを入れていた事を忘れていた。

（帰りに交番に行くか）

髪留めを握りしめ向かいにある交番へ歩き出した。

信号を青で渡り始めていた。

その時・・・

目の前に巨大なトラックが赤信号なのに突っ込んで来た。

（ウソでしょ・・・）

僕はトラックに体が跳ね飛ばされ宙に浮いた。

チャリン！

髪留めの鈴の音が聴こえた。

・・・僕は死んだのかな。

・・・でも、体は痛みを感じない。

・・・もしかして、意識ないのかな？

僕は稲刈りが終わった、田んぼの中央に仰向けに倒れていた。

続く

第一話 出会いました。

廻る回るよゝ時代は……

あの歌のフレーズが頭を巡る。バットを地面に立て頭を固定してグルグル周る

そして真っ直ぐ歩く、あのゲームみたいな感覚です。

僕はゆっくり、薄目を開けた。眩しいゝ天国かなあ？

「おい！生きてるみてーだなあ！」

僕の顔の目の前に5cmほどに真っ黒焼けた肌の男が顔を覗きこんでいた。近いよ！

「若！危のうございます！おかしな身なりをしています。変質者に違いありません！お離れ下され！」

「おい！こいつを屋敷まで連れて来い！」

「若！屋敷に入れるというのですか！無法者や暗殺者かもしれませんぞ！」

「いいから！縄で縛って連れて来い！」

そう言っと、やけ肌の、着物を着た男は立派黒い馬に乗っていつてしまった。

僕は仰向けに兵士（足軽？）みたいな人にされて縄で両腕を縛られた！

「いてえー！人権無視だあ！僕が何をしたっていうんだ！」

「交番は何処？弁護士さーん？何これ！僕は悪いことしてないよ！」

「きつさま！さっきから訳のわからない事を！さっさと立たないか！」

ガン！

僕は足軽の格好をした人に頭を蹴られた。

（えっ！何処ここ！周りは田圃に畑、農家だな。それにさっきの着物の男に足軽の鎧をつけて

僕を縄で後ろに縛り、一緒に歩いているこの人誰？）

僕はトボトボ歩いていた。

「早く歩かないか！日がくれてしまうぞ！」

ドン！

「いつてえー」

僕は背中をパンチされた。

（酷いよ！何この時代劇？大河ドラマ？ドッキリか何か？）

僕は空を見上げた。街灯、電柱も何もない。

（どれだけ田舎だよ）

僕は混乱していた。そしてお屋敷についた。

お屋敷は平屋建ての住居みたいだ。門番の兵士さんが二人立っている。

「怪しいものを連れて来ました！」

（怪しいものって、あなた達は何者ですか？）

いや！待て、冷静になれ！僕は誘拐されたのかな？

そして、お屋敷の中央に連れてかれたんだ。
そこには僕の人生を決める人がいました。

「ははははあああ、面白いな！そちは！」

「若！こやつはとんだほら吹き！もしくは頭のおかしい奴に違いありません！」

「いやいや！おもしれえ！何！お前の時代には4つの車輪の動く馬じゃない乗り物や空飛ぶ乗りものがあるのか！」

「こんな馬鹿げた話！聞いた事ございませんぞ！」

「馬は何処いったんだ！」

「馬は牧場とか、競馬場とかにいます」

「牧場？競馬場？よくわからんな！説明しろ！」

僕は、現代の事を若様にしゃべったんだ。ここはなに時代かな？

「未来って奴はおもしれえなあ！お前は名は何だ！」

「田中です。」

「田中！未来人の名前は、そんな名前なのか！ふーん」

「若！早く外に放り出しましょう！」

「それで！俺はこれからどんな人生なんだ！」

「どちら様でしょうか？」

「俺か！三郎 信長様だ！」

ガーーーーーん

（信長ってヤバイ人じゃないか！気に入らないとたった斬る人じゃないの？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2896z/>

僕の戦国時代

2011年12月10日11時05分発行